



藤野陽三

東京大学教授

◆巻頭言◆ 学会の将来構想を

日本地震工学会は発足1年にして会員数がすでに1500名近くに達している。会員減に悩む学会が多い中で、「日本地震工学会」に対する期待・関心が高い証拠であろう。

日本地震工学会では学会誌、論文集などの情報が電子情報の形態で会員に伝えられる。新しい時代の学会らしさをそこにも感じることができる。立ち上げ時で大変な時間と努力が必要であったことと想像する。担当されている方々の尽力に対しお礼を申し上げたい。しかし、誤解を恐れずに申し上げれば、会費に見合った「情報」を享受しているかと聞かれれば、個人的には？というのが正直なところである。これからを期待する所以である。

組織としての日本地震工学会は新しいものの、「地震工学」という分野は決して新しいものではないであろう。第一回の世界地震工学会議が行われたのが1956年であるから、すでに半世紀近くが経過している。私の学部時代に「地震工学」の講義を受けたのが今から30年以上前であるが、その時にはすでに金井清先生の「地震工学」という本も出されていた。私は「地震工学」のいう名前に憧れて、H先生の所に入れていただいたが、あれから30年が経っている。名称そのものが「新鮮味」を与える分野ではないと思う。

これまで「地震工学会」がなかったのが不思議？ということをごなたか言われていたが、まことにその通りと思う。と同時に、学会がなくとも大きな問題がなくやれてきたと感じるのもまた多くの意見ではなかろうか？学際的な学術発表の場「地震工学シンポジウム」も回を重ねており、また、大きな地震が起こるたびに結成される調査団はその多くがいろいろ分野の方の混成部隊であり、十分学際的にやってきたともいえる。私個人で考えても、地震工学の分野は横方向の人の繋がりは強い方と感じている。

1995年兵庫県南部地震での多大な被害は、地震工学の役割の重要性を改めて認識させた。しかし、今後の発展を考えたとき、従来のは違う新しい方向性が必要であることも事実である。学会の方向は、正しく会員の目標設定にも繋がる場所がある。不勉強なためか、これまでに日本地震工学会が今後何を指すのかを記述したものを知らない。

「学会」とは何であろうか？何のために会員は高い会費を払って参加するのであろうか？人により重みが当然、違うであろうが、

- ・ 学会誌等を通じて、当該分野に関する精選された情報が入手できる

- ・ 当該分野の振興・発展に学会が大きく寄与している。
- ・ 会員となることにより、自分の職業の証となっている
- ・ 自分の行っている研究・開発などを発表する機会がある。
- ・ 学会が社会貢献活動をしており、間接的ではあるが自分が貢献しているとの意識が持てる。
- ・ 会員であることが名誉である
などが考えられる。

個人的には、「日本風工学会」という会員数500名程度の小さな学会に属し、事務局長や理事を勤め、ある意味ではお世話をしてきた。数年前に、将来構想WGを会長から依頼を受けて立ち上げ、学会の活動についてレビューし、将来の進むべき道について答申を行った。

(<http://www.base.nacsis.ac.jp/jawe>参照)

そのとき、つくづくと思ったことは、委員会活動や研究発表などのいわゆる「学会」活動に直接に参画する会員の数は決して多くなく、せいぜい3割程度に過ぎないということ、残りはサイレント会員と呼ばれる方々であり、主として学会誌を通じて会員としての価値を見出されているということであった。その方々の学会への帰属意識、参画意識、便益意識をどう保つのが学会としては重要項目の一つであり、学会の将来構想もサイレント会員へのメッセージという意味でも大切と私は認識した。

日本の風工学は、これまで高層ビルや長大橋の活発な建設に支えられてきた面が多いが、5年、10年先を考えると、その方向での展開・発展には限界が見えており、新しい分野の開拓に学会自身も取り組む必要性が高まっているとの認識も将来構想を作成する大きな背景であった。学術貢献、社会貢献、国際貢献、そして学会の組織と運営についての提言をおこなった。すぐに実現されたものもあるが、まだ実現されていないものもある。その構想に対し、いま、若い会員から新しい提案がなされつつある。それでよいのだと思う。学会という組織を立ち上げた以上、会員に対しても社会に対しても、学会が何を指すのかを常に示し、それを更新していくことは責務であろう。

右上がりの時代に拡大した日本のあらゆる組織がいま見直しを要求されている。状況がこれだけ変われば、当然である。日本地震工学会は新しい組織ではあるが、そのルートを辿れば歴史のあるものである。それだけに、5年、10年先の学会の姿を語る必要性は高い。

日本地震工学会の会員の年齢構成を学会の中原さんに調べていただいたところ、20歳台が11%、30歳台18%、40歳台27%、50歳台31%、60歳台13%となっている。50歳台以上が実に会員の半数近くを占めている。10年先のことを考えれば、中堅会員、若い会員の参入が大きな課題と言えよう。となると5年先、10年

先を睨んだ将来構想も当然、30歳、40歳台の方に考えていただくのが適切と思うがどうであろうか？

学会の組織、運営、会費、研究委員会などの学術活動、表彰制度、学会誌・論文集のあり方、社会貢献、国際貢献など検討すべきことは実に多い。学会の中立性ゆえに意味のある技術者資格制度なども含まれよう。すぐ実現するかどうかはさておき、あるべき姿を語ることは楽しく、また、このような時代だからこそ必要なことでもある。歴史と伝統のある「地震工学」であるだけに、時代が急激に変化する中での展開は将来を左右する大事なことになるのである。